

第11章 書字指導

1 弱視児の場合

(1) 運筆に関する指導について

書字指導に関しては、大切なのは、運筆の様子を観察することである。なぞり書きの教材は市販されていることが多いが、このことがスムーズな運筆を妨げる場合がある。例えば、手首が思うように動かなかったり、思うように力が抜けなかつたり、筆圧が高かつたりする。そこで、自由になぞり書きをさせる。ぐるぐるとうずまきをかいたり、はらうような形の線をかいたり、いろいろな運筆や手の動きを経験させることも十分に行うべきである。その際の画材は、鉛筆、水性ペン、色鉛筆、マーカー類と様々なものも使う。いろいろな描画材に出会わせることも幼児児童にとっては、発見があつたり、好き嫌いを克服できたりするきっかけになるようである。自由になぞり書きの経験をしながら、目と手の協応動作の獲得にもつながるなぞり書きも指導する。

(2) ひらがなの指導について

運筆が安定してきたら、ひらがなの指導に入る。筆記用具としては、2Bの鉛筆を使用させることも多いが、弱視児には、シャープペンシルを使用させることが望ましい。芯の濃さは2Bを選ぶ。シャープペンシルを選ぶ理由としては、書いた字の太さが一定に保てるために、後から読み返すときに分かりやすいという点である。また、視力によって1.3mm, 0.9mm, 0.7mmなど見えやすい芯の太さを選ぶことができるのも利点の一つである。筆圧が強すぎる場合には、芯が折れたりすることなどから指導しながら筆圧を安定させることもできる。

まず、手本をよく見て書き写す練習を行う。その際、よく表れるつまずきとしては、周りのマスの線まで見る意識が育っていなかったり、大まかにしか見ていなかったりすることが原因となり、マスの中に書けなかったり、形が正確に取れなかったりすることである。そこで、個々の児童の実態に合わせて、練習ノートを作成することも必要である。ひらがな指導のノートの例を示している。右利き用の場合は、見えやすいように左側に手本の文字を書くことで見えやすくなる。視力や見え方によって、マスの大きさや罫線の色を変えたり、手本の字の位置を利き手によって変えたりして使用させる。

(3) 漢字指導の教材について

第1学年の2学期から新出漢字の指導に入る。指導に用いる教材としては、大きく



図1 ひらがな指導の例：右利き用

教科書体で書かれた漢字見本と児童の実態に合わせて作成する漢字練習シートである。

まずは、作成する際の目的と注意事項を述べていく。250ポイントの大きさの漢字見本は、見やすい大きさであるというばかりでなく、なぞって書き順を確認するためにこの大きさで作成する。最近では、タブレット端末等で漢字練習アプリを使用することもある。なぞることで、書き順や画数を確認できる。また、見えやすい大きさの文字を使用することで細部の止め、はね、はらいの確認をするという意味でとても有効である。次に、漢字練習シートは、その漢字の書き順や読み方、用法などを記入する欄、漢字を練習したりする欄を一枚のシート内に納めるとよい。また、練習する欄には漢字の手本はマスの左側(右利きの場合)を書いておき、それを見ながら漢字が正確にバランスよく書くことができるようにしている。さらに、第3学年以上になると、国語辞典や漢字辞典の使い方を練習する機会も多く取る。近用弱視レンズなどを使いながら、辞典の使用の練習を継続的、かつ長期的に行っていくことを重要視する。この指導で、速く調べることができる、分からないことはすぐに調べようという意欲も増す。狭い弱視レンズの視野で辞書を引かなくてはならないこと、晴眼児童と比較して弱視レンズという補助具を使用しなくてはならないことから、細かいことでも面倒がらずに調べようとする気持ちは大切であると考えている。

シートを作成する上で留意することは、視力値や見え方に応じて罫線の色や太さを個に応じて変更するという点である。これは、1回作成したものが他の児童に使用できないという点で作成上の負担となっているのは事実であるが、初期的には必ず行わなくてはならない配慮と位置付けている。ただし、見る力が付いてくると市販のノートの罫線の色や太さに徐々に近づけて、市販のノートにでも対応できるようにしていく。

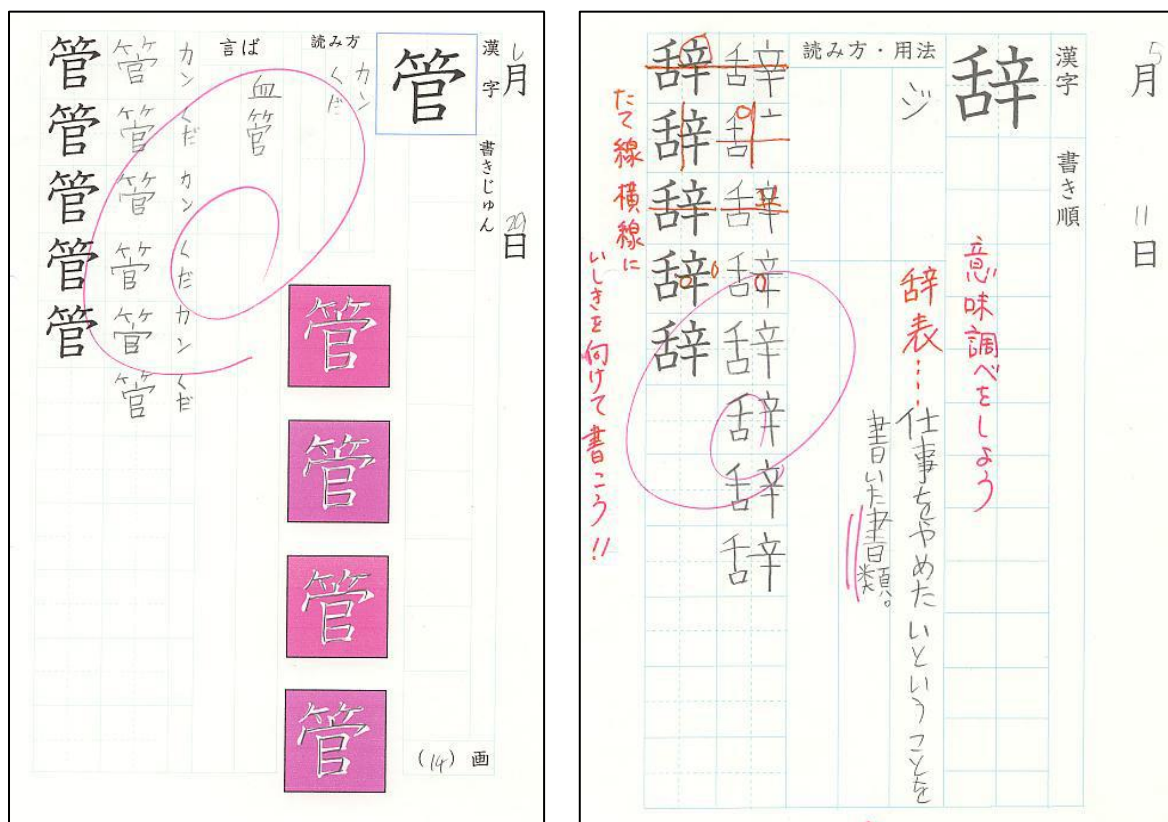


図2 漢字練習シートの例：右利き用

赤	生	耳	草
王	口	年	

図3 漢字見本：250ポイント，教科書体で提示

(4) 漢字指導の方法

指導の手順としては，漢字見本をなぞらせた後に，このシートを利用して，読み方を確認する。そして，手本を見ながら書いて練習していく。書いた後は，手本と見比べさせ，手本と同じように書けたか，いけないところはどこかを見直す時間を十分に設ける。自分で自分の課題を見付けられた時に十分に評価することを忘れてはいけない。それは，しっかり細かいところまで見ることでできたということであるからである。児童が見付けた自分の課題を基に次のマスに移って練習するという手順を取る。たくさん書かせることよりも細かいところまで留意して見ることに重点を置いて指導する。このことが今後，漢字を見る際に細部まで気を付けて見るという力につながる。

正確に書くことができるまでは学校で十分に指導し，家庭学習で行うようにさせる。学年が上がるにつれて，自分で計画を立てて漢字の練習に取り組めるようになることが望ましい。なお，書字の指導の基本は，数をたくさん書くよりも手本をしっかりと見ながら，始筆の位置や，マスの中の区切りの点線に留意させながら書くことである。日々のノートや日記，作文等でも既習漢字は使用するよう言葉に掛けるなど，指導者側の日常的な丁寧な指導が必要である。



図4 近用弱視レンズを使用しながらの漢字練習の様子

2 盲児の場合

盲児にとって、ひらがな、カタカナ等の墨字と呼ばれるものが存在することを理解することは難しい。そこで、その存在を立体コピーなどで知らせたり、カタカナの使用方法について国語科の中で学習させたりする。また、書写の時間等を活用して、表面作図器を用い、書く経験も行う。そこでは、字形を覚えるというよりは、スムーズな運筆を行うことや、形を知ることによって重点を置き、のびのびと楽しみながら書かせる。また、幼児期からいろいろな描画材を使用する経験をさせることが望ましい。

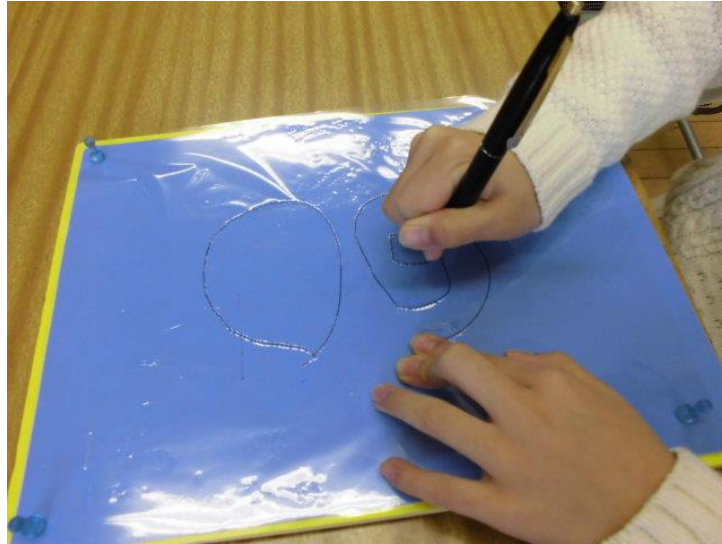


図5 表面作図器（レーズライター、シリコンラバー）を使用しての描画

漢字の指導は、日本語の文章を正しく理解し、表現するために重要である。字形や漢字の読み方、偏やつくり、意味などを発達の段階や興味・関心、意欲等を考慮して指導することが大切である。偏やつくりなどになる基本的な漢字については、形を立体コピーや点図等で知らせることも効果的な場合がある。国語科の授業と関連させながら自立活動領域で補い指導する。これらの力は将来、文章を書いて晴眼者とやり取りをする時に必要な力となる。



図6 立体コピーを用いての漢字指導